

オリーブの木

No. 92

2024年5月



ヤクーブ・ガザウイ、長崎・浦上天主堂でパイプオルガン演奏（NHKの取材を受けた）

イスラエルとハマスの戦争はすでに7か月半。双方でどれほど尊い命が犠牲になり、悲しみの涙がどれほど流れたことでしょうか！ 類を見ないほどの人道的危機で、明日に希望は見えません。遠い日本にいる私たちに一体何ができるか、今苦難の極みにある人々、特に女性や子どもたちに思いを馳せ、支援金を送ることくらいでしょうか。

ありがたいことに今年、「道の会」聖地巡礼者の方々が「イスラエルとパレスチナの平和を願う会」というボランティアグループを結成、募金のために日本各地でヤクーブ・ガザウイのコンサートを催して下さることに。5月上旬には長崎・浦上天主堂、福岡・ルーテル博多教会、熊本・カトリック手取教会で「平和を願うパイプオルガンコンサート」を開催しました。

演奏前にヤクーブが現地の様子を語り「自分はオルガンを祈りとして弾く」と話したので、「感動した。今絶望の中にいる人々のために祈ることができた」などと皆様から沢山の反響を頂きました。寛大なご支援もいただき、心から感謝しております。コンサート成功のため力を尽くして下さった皆様、また快くオルガンを使わせて下さった各教会の皆様感謝申し上げます。引き続き7月には関西、首都圏などでコンサートを続けます。応援をよろしくお願いいたします。

井上 弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502

Email ispalejpn@gmail.com

TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<https://seichi-no-kodomo.org>

パレスチナ占領や入植に立ち向かうイスラエル人達

森 佑一 (ドキュメンタリー写真家)

昨年12月後半から今年2月前半にかけてイスラエル・パレスチナを現地取材しました。今回の取材目的はイスラエル社会やユダヤ人について知ること、特にイスラエル人平和活動家やNGOに焦点を当てた取材をしました。彼らは少数派ではありますが、占領や入植に対し問題意識を持ち、解決や平和に向けて精力的に活動しています。そんな彼らを紹介します。

平和活動家ヨナタン・ザイゲンさん

彼の母親は現地で有名な平和活動家ヴィヴィアン・シルバーさんですが、彼女は10月7日のハマス攻撃によりガザ境界に近いキブツで殺害されました。母の死に悲嘆に暮れていた彼ですが、現在は辛い精神状態からなんとか持ち直し、平和の必要性や関心を世の中に生み出す為に国内外で講演活動を行っています。

「10月7日はウェークアップコールであり、人々はそれに気づかなければなりません。あの出来事は自然な流れの中で起きた結果で、これまで私達がやってきたことの為に起きた不可避なことだったと思います。今回のことを止める方法や再び起こらないようにする方法は平和を作るしかありません」。そう語る彼の言葉から強い決意を感じました。



ヨナタン・ザイゲンさん。
テルアビブ市内の彼の自宅にて

Breaking The Silenceのレベッカ・ストロバーさん

当NGOはイスラエル退役軍人により設立され、主に元イスラエル兵の証言を集めて、兵士の占領地での経験を社会の中で共有、問題提起し最終的に占領や入植に終止符を打つことを目指しています。

彼女が現在の活動に至ったきっかけは、兵役後に旅行で訪れたガーナにあります。当時ガーナでは多くのヨーロッパの人々が活動していて彼らの価値観で現地社会を変えようとしていました。それが非倫理的に感じられ、彼女自身今のイスラエル社会を変えなければならないと思う様になったと言います。



Breaking The Silenceのレベッカ・ストロバーさん。
テルアビブ市内のオフィスにて

そして現在、パレスチナ西岸の活動パートナーや友人達と関わる様になり、彼らと様々な面で共感できるようになった一方、彼女自身ガーナにいたヨーロッパ人と同じ視点に立ってパレスチナを見ていないか、自分達の価値観を押し付けていないかと省みることがあると言います。

「私達はパレスチナ人達が何を求めているのか聞いて、謙虚な姿勢で学んでいかなければなりません。私自身よりしっかり彼らに耳を傾ける様になったし、彼らに貢献していきたいと思う様になりました」。そう話す彼女は日々SNSを始め様々な媒体で占領の実態を発信し続けています。



情報交換をするB' Tselemのパレスチナ人とイスラエル人スタッフ。
南ヘブロンにて

他にも、占領地における人権侵害を調査し発信する活動を行うB' Tselemのスタッフの方に案内してもらい、入植が活発な西岸地区の南ヘブロンでイスラエル人活動家達に会うことができました。西岸のエリアC (イスラエルが行政と治安をコントロールする地域) で暮らすパレスチナ人は日々、入植者による暴力やハラスメントに晒されています。

今回見聞きしただけでも、オリーブの木の伐採、家屋の破壊、井戸水の汚染等があり、それらはパレスチナ人をその土地から追い出す為に行われていると言います。その様な状況下にある人々を守る為に活動家が南ヘブロンへ足を運び、パレスチナ人宅にホームステイしたり羊の放牧に同行したりするのですが、そ



パレスチナ人の羊の放牧に同行するイスラエル人活動家達。
南ヘブロンにて

んな中で入植者との衝突が起きることがあります。その際に彼らはカメラで状況を記録し、その情報を弁護士に送ったりSNSで発信したりすることで入植を抑止しようとしています。

活動家には20~30代の若者が多く、各々様々なきっかけでパレスチナの状況や占領政策に問題意識を持ち活動しています。彼らの中には仕事を辞めて

何週間、何ヶ月も南部ブロンに滞在している者もいれば、平日は仕事をし週末に南ヘブロンに来て活動する者もいます。

そんな彼らにあって驚いたのは、皆アラビア語で現地の人々とコミュニケーションを取り信頼関係を築いていたことです。彼らと一緒にホームステイした時もパレスチナ人の子ども達が懐いていて、その両親も彼らを頼りにしていました。それはニュース等の情報からは想像できない光景でした。

主流メディアやSNSから流れてくる情報の大半がガザの惨状に関するもので、それにより問題解決や平和に向けて活動する彼らの様な存在は見え難くなっています。戦争被害を伝えることはもちろん重要なことですが、第三者として、イスラエル国内にも今回紹介した様な人々が存在することに目を向け、彼らをサポートしていくことも平和に向かう上で大切なことだと思います。

トンネルの終わりに光がある

ヤクーブ・ガザウィ (オルガニスト、NPO現地スタッフ)

当NPO法人「聖地の子どもを支える会」のエルサレム現地スタッフ、ヤクーブ・ガザウィは、イスラム組織ハマスの攻撃があった去年10月7日は、ガイドの仕事でヨルダン川西岸にいました。難しい状況の中で観光客をどうやって無事にホテルに届けたか、そしてパレスチナ人の彼がガザの状況をどう考えるかを綴っています。

観光客と共に迎えた10月7日

私はグループ・ツアーの観光客を連れてキリスト降誕教会を訪問するために、バスでベツレヘムに向かっていました。その途中、空中を飛ぶミサイルの音が聞こえました。私はガザから発射されたロケット弾がイスラエル軍によって撃ち落とされたのかと思いました。時々あることでしたから。しかし、今回は様子が違いました。ともかくベツレヘムに入り降誕教会も訪れましたが、そこから出てきたところで見ただけで、私たちの頭上を雨あられと飛ぶロケットでした。エルサレムの方角や周辺からはサイレンの音が鳴り響き、私はこれまでに経験のない恐怖を感じました。そして、何がなんでも直ちにエルサレムへ向かわねばと、バスを走らせました。イスラエル側とパレスチナ側との境界が完全に閉ざされると出入りができなく

なるので、それを恐れたからです。私は検問所のイスラエル兵に、アメリカ人観光客を連れているからと何度も説明しましたが、ベツレヘムにいろと言われるばかり。それはできない相談でした。

仕方なく検問所に暫くいたところ、たくさんの車が止められているのに次々と通過する車があるのを見ました。イスラエル兵になぜかと尋ねたところ、「予備役兵だから」という返事。予備役？というのは戦争なのか、これは大変なことになったと思い、検問所から検問所へと回って6時間後にホテルにたどり着きました。しかし、観光客たちをどうやってイスラエルから出国させるかが問題でした。幸い、ヨルダン経由で脱出する方法が見つかりました。とはいえ、通常よりずっと北まで行かねばならず、バスの中で「何も起こらねばいいが」とびくびくしていました。

がれきのガザに届く支援金

やっと我が家で休んでも、落ち込んでしまいました。思い出すのは、父が「ガザはなくなってしまう」と言ったときの顔です。10月7日の出来事を映したビデオを見て、私も「ガザはおしまいだ。パレスチナとイスラエルの関係も終わりだ」と思いました。ガザは

一掃されたと言えるほどがれきと化し、たくさんの人が殺されましたが、敢えて言えば、これは予想できたことです。あの日に起きたことの恐怖が、あまりにも大きかったからです。

その後の数日間、私はひたすら聖書を読み、祈りました。そして行き当たったのは詩編42です。「お前の神はどこにいる」という問いがあり、章の初めにある答えは「涸れた谷に鹿が水を求めるように 神よ、私の魂はあなたを求める」。その意味は、私が神を求めるのであって、神が私を探してくれるのを待つのではない、ということです。では、神がどこにおられるかを判断する私とは何者なのか。ヨブ記を読むと、信仰が彼を強く支え続けました。そこで私も教会へ行き、神と対面しているうちに、内面に力がみなぎるのを感じました。そして自分には、友人や家族など他者を支え、落ち込み悲しみに暮れている人々を支える強さが必要であると思い至ったのです。

まず私が決心したのは、ガザで戦争の被害にあっている人々を救う手立てを見つけることです。そして、日本から支援金を送る事業が始まったのです。通常の送金ルートではなく、カトリックの「エルサレム・ラテン総大司教区」という信頼のおける組織を通じ

て送るもので、聖地の子どもを支える会が募った支援金が無事ガザに届けられています。

「架け橋」プロジェクトを今年も

現在の状況下では不可能と思われるかもしれませんが、平和構築の活動が必要であるという私の信念は、ますます強くなっています。だから、井上弘子理事長から、これまで続けてきたイスラエルとパレスチナの若者を日本で交流させる「平和の架け橋」プロジェクトを、今年もやるべきか尋ねられた時、「もちろん。前進し続けるべきです」と答えました。今年は長崎に行く案が出ています。被爆地長崎は、戦争の災禍をいかに克服し豊かさを取り戻したかを教えてくれ、和解への道を話し合うのにふさわしい場所です。困難はあるにせよ、プロジェクトが実現し、その努力が実を結び成長し続けると確信しています。

皆様、イスラエル、パレスチナのみならず世界全体に平和が訪れるよう祈ってください。そして、思想や信条の違いがあってもお互いに許しあうことによって、誰もが平和な日常を送れるよう祈ってください。反目し合い戦争をして、短い人生を無駄に消費しないようにしたいものです。

すべてを失いガザを去ることに

アルジェルダ・ファミリー

聖地の子どもを支える会の2018年夏の「平和の架け橋」プロジェクトにガザから参加したラミ・アルジェルダさんはプロジェクトが終わりガザに戻ったあと結婚し、家庭を築きました。しかし、ハマスによる奇襲へのイスラエル軍による報復攻撃で家を失いました。ラミ、マルヤーン夫妻と1歳間近の娘カイリーの一家が、ガザから離れる決断をするまでの体験を、マルヤーンさんが記録しました。

教会に爆撃、身内や友人を失う

ガザではここ10年だけでも2度の大きな戦争があり、イスラエル軍による攻撃で何百人、何千人というパレスチナ人が犠牲になりました。その戦争のトラウマから人々がようやく立ち直り、正常な暮らしを取り戻そうとし始めたところへ「あの日」が来ました。

忘れもしません、10月7日は娘の新生児用ワクチンを摂取しに行く予定でしたが、ロケット弾を発射する音で目が覚めました。予定をすべてキャンセルし、家で事態が悪化していくのを見守っていました。爆

撃で電気は止まりインターネットもつながらないため、座り込んで爆撃音がこだまするのを聞いているしかありませんでした。二日間閉じこもっていましたが、爆撃がすぐ近くに迫り、私たちは死ぬんだと思いました。

なんとか生き延びて次の日、イスラエル軍から家を離れるよう言われ、パスポートと身分証、少しの衣類、娘の食べ物という最低限のものだけ持って教会の避難所に向かいました。そこには食料も寝具も、水や電気の供給もほとんどなく、シャワーは週に1度だけなど、まっとうな暮らしはできませんでした。洗濯は手洗いで、場所がないので墓地を利用したり、調理用のガスがないので料理もろくにできないといった有様。娘には満足な食事をさせられず、破壊された我が家から助け出してきた愛猫は、病気になって死んでしまいました。

ある日、夫と教会の中庭を歩いていたら突然、すぐ近くに爆弾が落ちました。教会の建物の一つが直撃

を受けたのです。親族や友だち17人が無残に殺されました。うち9人は、朝のうち遊んでいる姿を見ていた子どもたちでした。私たちは間一髪、シェルターに逃げ込んでいましたが、すさまじい爆発音がした時、私は思わずシェルターから飛び出しました。そこには5カ月の赤ん坊がぐったりと横たわっていました。すぐ後ろについてきた私の父が赤ん坊を抱きあげ、救命の手を尽くしましたが助かりませんでした。「みんな死んでしまった!」という叫びが私の頭の中をめぐるのが何とか追い出したい思いでした。

救いとなったのは、近所の人たちが駆けつけ、がれきに埋もれた犠牲者を探すのを手伝ってくれたことです。それでも、重いものを動かす機械がないため、がれきの中から引き出せた犠牲者の遺体は半数だけで、あとは長い夜が明けるのを待つしかありませんでした。亡くなったうちの一人は私の姉の夫で、息子をかばって死んだのでした。

離れたくはない、苦渋の決断

私は運のいい方でしょう。2月のこと、重傷を負って病院にいた身内を訪ねた時に見た街の色は、赤く変わってしまったという印象でした。至る所に人、

血、そして積み重なる遺体。石段や通路、さらには屋外の草の上に寝ている人も見ました。叫び声や泣き声が満ち溢れ、中には愛する人たちを亡くして正気を失った人たちもいました。また、負傷した民間人たちが屋外で、葉もなしに手術を受けていると知り、ショックでした。病院には、手術のための部屋もベッドも医薬品などの供給もないからでした。

私たちが今いるガザ北部は、戦争そして南部と完全に切り離されていることによって、生活が厳しく制約されています。人々の移動も物資の搬入もほとんど許されず、この自由のなさのために病院の機能が破壊され、人間としての最低限の尊厳も奪われています。これまで、私たちはガザを離れるなんて考えたこともありませんでした。貯えもでき、家を手に入れて家具を備え、車も買いました。しかし、すべて失いました。今、私たちは残念ながら、この愛すべき街を離れることを計画しています。離れたくはありませんが、ほかに選択肢はありません。ガザはかつて、平和と愛と繁栄の街でした。今やがれきの山と化し、この先長いこと、家族の笑いも幸せな姿も見ることはいでしょう。

※ラムは今、一家で無事にカイロに逃れています。(編集部)

10・07はイスラエルにとっての9・11

村上 宏一 (当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長)

イスラム組織ハマスによるイスラエルへの奇襲攻撃に端を発したガザ戦争は、7カ月を超えてしまいました。パレスチナ側の民間人の死者は3万5千人を超え、イスラエル軍の攻撃で家を破壊されて百万人以上が帰る場所を失いました。人道上の問題であるとして、イスラエルに対する国際的な非難も強まってきました。読者の間にも「テロへの怒りはわかるけど、やりすぎじゃない?」という見方が増えていると思います。停戦交渉が進展か、という情報もありますが、イスラエルのネタニヤフ首相は攻撃をやめないと強硬で、国民の多くも、ガザの民間人の犠牲はやむを得ないと見ているようです。去年10月7日のハマスの残虐なテロ行為は、それほど深くイスラエルのユダヤ人に衝撃を与え、「ハマスを殲滅」の報復心を燃え立たせています。それは、2001年9月11日にニューヨーク貿易センタービルが旅客機に

よる自爆攻撃を受けるなどした同時多発テロの衝撃と、それを受けて米国が「反テロ戦争」を掲げて報復に走った歴史を思い起こさせます。

「ホロコースト」に実感を与えた

これまでも度々述べてきたことですが、イスラエルにとっての最優先政策は治安第一であり、安全保障が常に政権の念頭にあります。差別され虐待された歴史を抱えるユダヤ人にとっての民族的課題として意識されてきたものです。第二次世界大戦中にナチス・ドイツによって組織的に実行されたユダヤ人迫害・虐殺である「ホロコースト」を経て建国したイスラエルは、当初こそアラブの領土だったヨルダン川西岸が脇腹を圧迫するように迫り(次ページの地図参照)、実際にそこがパレスチナ解放を掲げるゲリラの出動拠点にもなっていました。



しかし、1967年の第三次中東戦争で西岸、ガザなどを占領してからは、武力を背景にパレスチナ側を圧倒するようになり、その軍力は中東一となってよそからのどんな軍事的脅威もはね返せるものとなっています。それでも、パレ

スチナ人による武力的抵抗があると、激しくつぶしてきました。反撃が度を越していると言われようとも、被害者としての歴史を盾にとって「自衛のため」で通してきました。

エルサレムには、ユダヤ人迫害の歴史を伝えるホロコースト記念館があり、子どもたちは必ず見学します。「ホロコースト」は、被害者としての歴史を呼び起こすキーワードで、この言葉はイスラエル人なら誰もが知っています。しかし、直接の体験者、生々しい体験談を聞かされた世代は減っていき、若者の多くは抽象的な概念としてのホロコーストしか知らなくなっていたのではないのでしょうか。ハマスによる「10・07」は、「ホロコーストの恐怖のない安住の地を得た」と思った世代に恐怖の再現を思わせ、知識としてしかホロコーストをとらえていなかった世代にも、それを実感として突きつける絶大な効果をもたらしたのです。

イスラエルは建国以来、何度も戦争を経験して多くの戦死者を出しました。1967年の第3次中東戦争で圧勝した後の70年ごろでも、私（筆者）は現地でも、母親たちがラジオのニュースに常に耳をそばだてるのを見ました。死者の報道がないか、兵役に就いている息子たちは無事かを確かめるためでした。そんな光景が遠い過去になったいま、10・07事件が起きたのです。それも、兵士ではなく非戦闘員が一度に1,400人も殺害されたり200人以上が拉致されたりと過去に例のないことでしたし、殺害の方法がことさらのように残虐なもので、まさにホロコースト以来、初の経験だったのです。だから「ホロ

コーストを繰り返させるな」という旗印が共通認識となり、「ハマス殲滅」の報復攻撃は当然という思いをイスラエルのユダヤ人市民に行きわたらせたのでした。その意味で、「対テロ戦争」を掲げて米国民を報復に駆り立てた9・11事件とよく似た構図だと思えるのです。

ハマス殲滅どころか「養成」？

では、イスラエルにとっての9・11なのだからという理由で、イスラエルの容赦ないガザ攻撃にも理解を示すべきだと言いたいのかということ、そうではありません。

そもそも9・11に際して当時カイロにいた私は、テロを容認する気は毛頭ないものの、「対テロ戦争」に走る米国を中心とした世界の熱狂的風潮に対し、冷めた思いを抱いていました。次のように書いた記事の一部を再掲します。

あの9月11日、ニューヨークの世界貿易センタービルの廃墟を前に、関係者は「何もしていない我々が、なぜ」という思いを抱いただろう。筆者は巨大ながれきを見て、イスラエルにより破壊された家の前にたたずむパレスチナ人のことを思い出していた。無許可の建物だから、あるいは銃撃の盾に利用されるからという理由で壊されるのだ。ニューヨークの場合、破壊が1カ所に、しかも短い時間に凝縮されたため、そのすさまじさは強く人々を打った。しかし「なぜ我々が」と理不尽さを恨む気持ちは、パレスチナの場合も同じだ。家の破壊だけではない。イスラエル軍の銃・爆撃による家族の死、外出禁止などの体験は、場所も時間も散らばっているから目立たず、犠牲者がいても1件ごとの数が少ないため大きなニュースにならないが、積年の恨みの総和はニューヨークの場合をしのぐかもしれない。

テロを非難するのは当然のことです。ただ、どうしてこんなことが起きるのかを問うことも必要だという思いがありました。同じようなことを今回のガザ戦争にも感じるのです。国連のグテーレス事務総長が去年10月24日の国連安保理で、人道的停戦を訴えて語った言葉を、改めて思い出します。グテーレス氏はハマスの攻撃を強く非難しつつも「何もないところから起きた事態ではない」と認識することも重

要だ。パレスチナの人々は56年間、息が詰まるような占領下に置かれてきた」と指摘しました。

このような発言は、イスラエルやその支持者たちからすぐ「テロを支持している」と非難されますが、そうではありません。米国やイスラエルのように、やられたら何倍にでもやり返せる武力を持たず、頭を押さえつけられ、怒りのはけ口もなく歯ざりしている人々のことを考えるべきだと言っているのです。イスラエル側は「ハマスを殲滅するため」として戦争を進めてきましたが、例え現在の戦闘員を全員殺したとしても、多数の同胞・肉親を殺傷され、家屋を破壊され、帰る場所も奪われて難民化させられた人々の大半は「イスラエルを許せない、奴らを追い出せ」と、ハマスの考え方をするのではないのでしょうか。「殲滅」と言いながら、将来のハマスの戦闘員を育てているようなものです。

痛みを超え和平探る動きも

イスラエルのネタニヤフ首相も軍の幹部も「ハマスを殲滅のためには多少の民間人の犠牲はやむを得ない」と、死者が1万人を超えた段階から言っていました。前にも発した問いですが「多少の」とは何人ぐらいを指すのでしょうか。戦争が半年を超えた4月中旬までの死者は、ガザ保健省によると3万4千人を超えました。

朝日新聞の高久潤エルサレム支局長が、ガザでの戦闘に参加したイスラエル兵にインタビューした記事(4月7日朝刊総合面)で、1人の兵士が、イスラエル軍が進軍した際に残っている住民はハマスと全く関係ない「普通の市民」ではない可能性が高いとみなし、戦闘員とみなせたら「ただちに撃つてもかまわないことになっている」と証言したのを紹介しています。イスラエル軍は「モスクや学校などは攻撃しないよう努め」「200m以内に子どもがいれば発砲しない」などの軍規を定め、「世界で最も倫理的な軍隊」を自称しています。しかし、ガザの死者の三分の一近い1万人が女性であり、子どもも多数にのぼる事実をどう見るのか。

伝えられているハマスによる攻撃は、拷問を加える、目玉をえぐる、足や指を切断するなど、書くものはばかられる残虐さで、ホロコーストを思い起こさ

せるものでした。とはいえ、空爆で破壊されたがれきの下で死んだ人々も手足がもがれたり、押しつぶされたりと無残な有様だったでしょう。空からの攻撃では見なくてすむ残酷さは、ハマスとどちらの方がひどいか、どちらの方が倫理的か、と比べる話ではないでしょう。

前述の高久記者は、エトガル・ケレットさんというイスラエル人作家にもインタビューしていて(4月18日朝刊文化面)、その中でケレットさんは「あの日多くのイスラエル人が『襲われている人の視点』で一部始終を(テレビニュースで)目撃した」「まるで自分が大虐殺の渦中にあるかのような経験をしたことが、トラウマになっている」と語り、「自分や自分のくみする側の痛みだけを増幅し、そうでない側の痛みを無視する『選択的共感』に陥っている」と述べています。ハマスに同胞を惨殺され、イスラエル人の多くが、ホロコーストを許さないという文脈でガザの民間人の犠牲に痛みを感じていない現状をこう語るケレットさんの両親は、ホロコーストの生き残りだそうです。

イスラエルにも、悲惨な殺し合いをやめて両民族が向き合って和解を模索すべきだと考える人がいます。ドキュメンタリー写真家の森祐一さんが本誌に寄稿した記事(p.2)で、平和活動家だった母親がハマスに殺害された衝撃を乗り越え、パレスチナ問題への関心を持ってもらおうと講演活動などを行っている人や、イスラエル退役軍人からなる団体が今も占領や西岸への入植を終わらせようと活動していることを紹介しています。

パレスチナ側も、ハマスのように「イスラエルの存在を認めない」と言ってるようではダメで、イスラエルとの二国家共存を明確に掲げるべきです。そして、パレスチナ側に和平と共存を語る環境をもたらすためには、イスラエル側も二国家案を受け入れ、パレスチナ人を絶望的な暴力闘争へ追いやらないよう、強圧的な政策を改めるべきです。



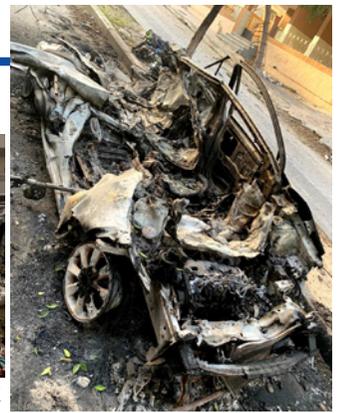
ガザ空爆の現実



▲破壊されたガザの街並み



▲▶大破したハデルの自宅と車



▲電気が来ない教会、ろうそくのあかりで聖書朗読



▲教会で生活する家族



▲数日の休戦中、久しぶりで再会したハデルとラミ（破壊されたギリシャ正教会の前で）

空爆をぬってピッツアバツラ枢機卿のガザ訪問



▲感謝のミサのあと、枢機卿を中心に記念撮影

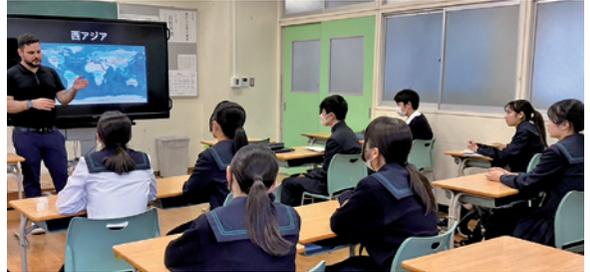


▲枢機卿、破壊された街を視察



▲集会所で、教会関係者と懇談する枢機卿

ヤクーブ・ガザウイ 日本での日々



▲東京、二松学舎大学附属高校でイスラエル・パレスチナ紛争についてレクチャー



◀熊本、カトリック手取教会で、オルガンコンサート前のリハーサル

▼長崎、浦上天主堂前道の会巡礼者と「イスラエルとパレスチナの平和を願う会」メンバーと記念撮影



写真撮影：森佑一、ヤクーブガザウイ、佐藤真紀、ハデル・アルスラニ、ラミ・アルジェルダ、ガザの教会に避難している人